

観光事業の発達と漁村の変貌 (其の二)

—和歌山県白浜町付近観光地の人文地理学的研究—

藤岡ひろ子

緒言

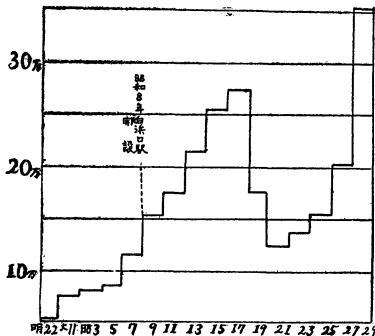
前号に引きつゞき、1956年3月白浜に於て調査した事項を報告したいと思う。前号に於ては、漁村の調査を主体としたのに対し、今回は観光地の調査を主とし、観光業の中心地白浜地区と、隣接する瀬戸漁村地区との経済的関係に重点を置いて考察してみた。

(五) 白浜観光地発達の過程

a 紀勢西線開通前

奈良時代、既に湯崎付近の温泉に天皇が行幸されたと伝えられ、牟婁の湯、鉛山の湯ともよばれ、湧泉は相当に古い時代の事であったらしい。その後付近に鉛の出る鉱山が発見され、採掘が行われて現在でも鉛山の地名が残っている。観光業の発達する以前は鉱業を生業とする戸数も多かつたものと推察される。鉛山村と、漁村を生業とする瀬戸村とは互に隣接し、距離的にも目と鼻であるが、歴史的に犬猿の仲で、漁村の者は鉱山従業者や温泉関係者をけいべつし、鉛山の者は貧しい漁村の生活をいやしみ、久しい間対立を続けた。古老の話によれば、鉛山村と瀬戸村とは紀勢西線開通以前、ほとんど通婚は行われ

第一図 白浜町宿泊人員の変遷
明治22年～昭和29年



ず、むしろ、互に他地方との通婚が行われたということである。明治9年、両者の合併が行われ、瀬戸鉛山村と称するようになり、当時は湯崎に少数の湯治客が、それも米を持参して来訪する程度であつた。それまで中間の白浜地区はまだ十分に観光地として発展していなかった。大正8年、白浜土地建物株式会社が、瀬戸鉛山の網元によって創設され、道路を買い上げ、山麓をひらいて、新しい温泉を掘り、大阪商

船の遊覧船を白浜に誘致したのが、白浜観光事業の嚆矢と言う事が出来る。

湯崎には紀勢西線開通前は7戸の旅館があつたが、開通後は白浜には大体5戸で、開通以後は14戸もふえている。

b 紀勢西線開通後

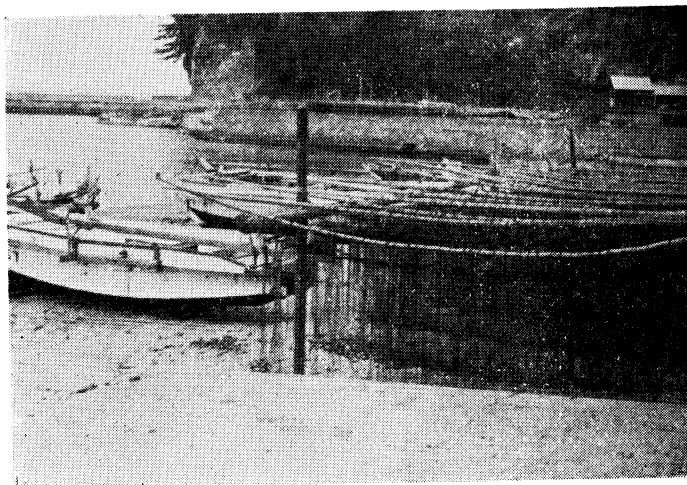
昭和8年、紀勢西線白浜口駅が開設されると、観光客は急増し、大正15年白浜宿泊人員（白浜町全体）29,950人（指数100）に比して、駅開設後の昭和9年には101,368人（指数340）、昭和17年222,534人（指数740）、昭和20年終戦の年は47,727人で（指数160）、昭和29年は308,801人（指数1030）でうなぎのぼりに隆昌して、戦前最盛時の宿泊人員を遙かに上まわっている。

(六) 白浜観光地区と瀬戸漁業地区との経済的關係

a 観光地区の成長

古い温泉地湯崎に対して、白浜温泉地区は、昭和9年頃より目に見える発展を是はじめた。之に対し瀬戸漁村は次第に衰退した。漁獲は、あじ、さば、地曳による雑魚等の外、いせえびは岩浜海岸に多くとれる。しかし、瀬戸漁業地区では、高価に売れるいせえびも長年の乱獲によってその量が減少している。又いせえびを除く魚類は余り観光地用にはあてられず、かつお、まぐろ、たい、其の他の観光地用消費魚類の多くは、串本、勝浦、田辺等の大規模な水揚げ場に依存することが多く、結局、瀬戸漁業地区の漁獲は大阪方面に送られる事が多い。

第二図 瀬戸の『えびあみ』(1956年3月)



観光事業の発達と漁村の変貌（其の二）

第三図 実験所北小規模な地曳（1956年3月）



一方、白浜観光地区は、次第にその範囲を拡げ、バスや自動車の増設、土産店の増加、旅館業の外、パチンコ店、ダンスホール、玉突場、映画館、公園等の施設がつけられ、海上を走る遊覧船（竜宮見物と称し、舟底に透視ガラスを張った船）等もふえ、魚類が逃散する事も多く、漁業地区の衰退を招いている。

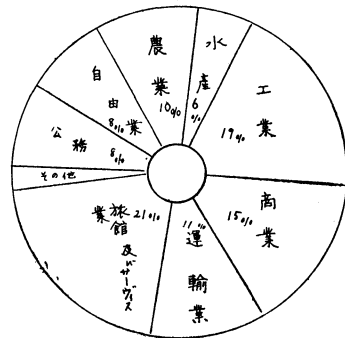
b 職業別世帯数

水産業世帯は、次第に旅館業、サービス業、交通運輸業、商業に吸収され、之等を併せると47%の多きに上り、漁業従事者が積極的に観光業に融合することによって、経済的解決に向かうとする傾向にある。

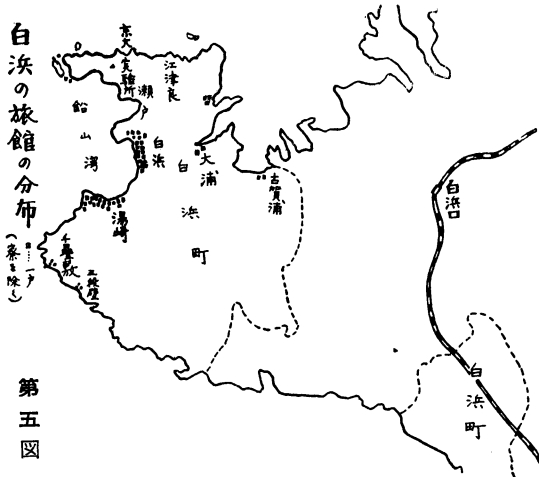
c 資本の問題

白浜観光地区と、瀬戸漁村との経済的依存度が比較的稀薄である事の第一の原因としては、白浜観光業の資本系統が、ほとんど外来のものである事があげられる。各旅館業の出資者別出身地を調査したところ、白浜地区では、調査旅館19の中、田辺市6、台湾1、新宮市1、長崎1、大阪2、堺1、和歌山県有田町2、朝来村1、上南部村1、其の他1で、地元のものは初期に建てられた土地建物会社経営の1のみで、ほとんどが外来者による導入資本に依存してい

第四図 白浜町職業別世帯（旧南富田村を除く）



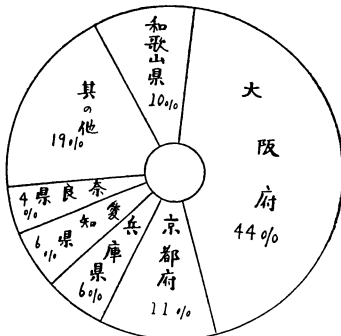
る事がわかる。なお、歴史的に古い湯崎地区では、調査旅館16の中大阪4、湯崎9、和歌山県西岸牟婁郡1、和歌浦1、官営1等で、地元経営者が圧倒的で浮動性が少ない。大浦地区は和歌山県日高郡1、白浜土地クラブ1古賀浦地区では新宮市1となっている。



(七) 白浜観光業の商圈

1956年1月現在の調査によると、府県別宿泊人員は第6図に示すパーセンテージとなる。大阪、京都、兵庫の阪神工業地区及び中京工業地区愛知が、白浜の商圈の中に包含され、併せて全体の67%を占めている事は、観光業立地の好条件と言うことが出来よう。最も多きを示す阪神間からの顧客は、61%となる

第六図 府県別宿泊人員調 (1956年1月)

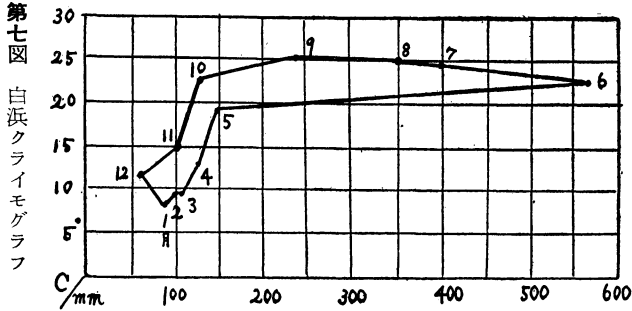


が、大阪天王寺より白浜口駅までの鉄道距離は約166km、普通列車で約4時間の行程、旅客運賃往復700円程度で、一泊旅行には極めて適切であること、南紀方面に多い観光地、白浜温泉、紀伊椿温泉、串本、潮の岬、湯川温泉、勝浦温泉、新宮等の中、白浜温泉が最も阪神地域に近い位置にある事、更に気候的には南紀特有の冬温暖、夏涼冷の気候型で、健康上好適であること等のため、観光及び保養を目的とする顧客が次第に増加しつつある。

(八) 旅客の吸引力

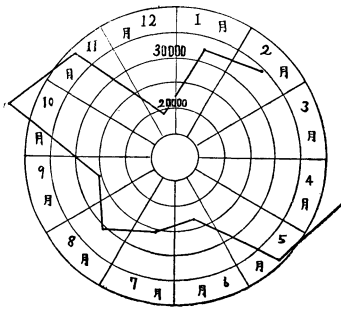
白浜に於ける旅館の収容能力は、一日に一般約2200人(団体なら3450人)に加えて、宿泊しない日帰りの旅客があることを考えれば、旅館が満員の場

観光事業の発達と漁村の変貌 (其の二)



合の白浜町人口は、相当の数に上るものと見られる。白浜口駅における定期外の降路人員1日平均840人の多きに上り、最も客数の多い4月、10月には、1日平均1500人を数えることとなる。(30年4月=1日平均1470人、10月=1日平均1462人となる。) なお白浜町の旅館の室数は1000室以上であり、女中の人数は大體二部屋に1人の割にあ

第八図 白浜口駅降車人員 (1955年2月~1956年4月)



る。白浜観光地に多くの旅客を吸引する原因は、既に商圏の所で述べたが、温泉の外、白良浜、湯崎温泉、千畳敷、三段壁、平草原、瀬戸浜、貝寺水族館、植物園と、海岸にそって景色の美しい観光地が数多くある事その中に数えられる。

結 び

前号では漁業地区を本号では観光地区を調査報告しましたがこのままの資料

宿泊人員府県別

府 県	男	女
北海道	7	5
東京	296	139
静岡	275	235
愛知 <small>名古屋</small>	618	328
知 <small>市外</small>	403	246
岐阜	313	185
滋賀	324	157
京 <small>京都</small>	1,425	906
都 <small>市外</small>	461	325
大 <small>大阪</small>	5,384	2,929
阪 <small>市外</small>	2,370	1,541
兵 <small>神戸</small>	471	312
庫 <small>市外</small>	1,063	727
奈良	724	441
岡山	119	97
広島	261	101
四国	192	118
九州	82	8
県内	1,762	958
其他	717	447
合 計	17,267	10,205

では決定的な結論を出す事は困難で危険であるが、一応次のような事が論じられる。

一産業の興隆が同一集落に於て他の産業の衰退を招く一例を白浜町地方に於て見ることが出来る。但し、瀬戸漁業地区の衰退は、ただ単に隣接地の観光業発展の為とのみはいい難い。即ち、鉛山湾の西北に当る田辺湾を中心とする田辺市は大規模な水揚地を持ち、遠洋出漁、沿海漁業共に盛大であり、更に距離を置いて東南では、勝浦、串本等が遠洋漁業根拠地としてマグロ、カツオ漁業の外アラフラ海にまで進出している。両者の中間にある白浜漁業地区では、地形的に発展的な後背地を持たないこと、資本が貧弱で、漁船は小型船で且つ少数であること、漁業専門人口が少いこと等のため、到底田辺、勝浦、串本には抗しがたく、たとえ白浜観光地が勃興しなくても、水産立地は極めて不定定になったのではないかと考えられる。ところが、白浜観光地が急激に発展し、温泉の水が沿岸に流入した為近海の鹹度が減少し、観光地の騒音のため魚類が逃散したこと、漁業従事者は水揚の浮動し易い漁区の不安定な生業から比較的収入が多く安定性のある観光事業関係の生業へと転向した事等が、漁村の衰退に拍車をかけたものと思われる。今後は漁業地区をも観光業地区の一環に併合し、発展する可能性が大であると見られる。

なお、今日では白浜は阪神工業地区を大きな後背地としているため、阪神工業地区の盛衰が白浜の盛衰と密接な関係を持つことは言うまでもない。

以上の現象は、戦後一都市に勃興した新興工業が、古い手工業を吸収併合するという形でよく見られ、又一国の生産活動についても見受けられる現象である。